

竹光浪人

大塚 喜子

山陰の王貫街道沿いの宿場町、亀嵩の大手の前に置かれた用水桶を背に、瘦せた浪人が脚を投げ出したまま動けないでいる。病気で動けないのではない。腹がへって動けないのだ。夕暮れ時とて、誰もがこの浪人に目もくれず過ぎていく。名前を大矢喜作という。

この二年あまり、喜作は雑役の日雇で糊口を凌いでいたが、十日前から、その仕事にも有りつけない。二日前から、何も食べていない。じっとしていると腹の中で水が動く音がする。もう水は喰い飽きた。飲み飽きたのではない、喰い飽きたのだ。

水を飲む時、噛む真似をする。顎が動く、束の間であつても、喰っている。錯覚する。この三日間、朝から晩まで水を喰っている。胃の中は冷たいまま。でもいつ迄も温まらない。

飛び回っていた蠅が頬に留まっても、それを払う気力がない。便意もない。なのに、小便はよく出る。

「おこう。おはま。おいよ。」自分の帰りを待っている三姉妹の名を呼んだが声にならない。

「おこう。おはま。おいよ。」もう一度、喉をふり絞って呼んだ。三人は自分の子ではない。自分は三人の父親でもない。

喜作は姉妹の母親のお由と懇ろな仲だった。三年前、お由が「この子たちをよろしく頼みます。一人前になったら、売り飛ばそうとも勝手だが、それまでは……それまでは……何とか三人を生き延びさせてやってくれ」と言い、息も絶え絶えに喜作の手をにぎり続けた。喜作は躊躇うことなく「任せろ」と言った。お由は冷たくなった後も、手だけは何時までも温かかった。

約束したからには姉妹を飢えさせるわけにいかない。喜作はどんな仕事でも選ばなかった。好きな酒を断ち、銭湯の銭もケチって姉妹を養ってきた。姉妹の成長に従い、食べるコメの量は増える一方なのに、仕事は減るばかりだ。ありついた仕事も賃金を値切られた。

亀嵩は松江から流れてきて自らを「出雲小僧治郎吉」と名乗る怪盗が幅を利かせている。商人は元より、たたら鉾の鉄師や銀山の山師までもが「どうやら

お武家様の世は終わるようだ。お殿様は（松平安定）上洛してお公家様に会った。江戸は唐人で溢れている……等と噂している。

仕事を探して、今日はここまで来たが、その後が思い出せない。気がついたらこの場所に座り込んでいた。

右肩に人の気配を感じた。首を回す気力もないまま、じっとしていると、勢いのある足音が迫って、視界の片隅に女が入って来た。両手で下腹を支え持っている。身重だ。女の目に己は入らなかったようだ。或いは、死んでいると思つたのかもしれない。女は行き過ぎて立ち止まると、恐怖にひきつった顔で自身が来た道を振り返った。喜作に気づくと、生きているかを確かめるような口調で「もし」と声をかけてきた。喜作は無言で頷いた。女は切羽詰まった口調で

「悪い男に追われています。お助けください」と言った。喜作が答えられないでいると、女は懐から財布を取り出し、

「なにとぞ、これをお納めください」と言い、紐を結び直した財布を差し出した。喜作が無言でその意味を問うと、

「このような身体では逃げ切れません。なにとぞ、私をお助けください」女は懇願するが、喜作とて同じで、この身体では何もしてやれない。更に女は

「何とぞ、何とぞ」と泣きながら言い、追手の気配を感じると、手にしていた財布を喜作の股の間に投げ、東へ駆けだした。

女の足音が遠のいた後、喜作は投げ置かれた、ずっしりと手ごたえのある財布を拾い上げた。女の頼みを受けたわけでない。女が言ったことが本当で、自分の身体がこんなでなければ、助けてやれるかもしれない。だがこの身体では無理だ。一先ず預かることにして、財布を背中と用水桶の間においた。

喜作は親の代からの浪人である。両親は一人息子に仕官の夢を託し、食うものも食わず、松江城下の白石道場で剣術（無双直伝横田流）を、中川の藩校で学問（水戸学・平田学）を習わせたが、それは結果として何の役にも立たなかった。両親は失意のうちに死んだ。

なのに、喜作が未だに、侍の身分にしがみついているのは、親への忠心と言うよりは、侍の身分を捨てたからと言って、最早、職人や商人になるには手遅れであると、知っているからだ。

一人だけならこのまま死んでもいいが、三人の幼子を餓死させるわけにはいかない。なんとかさせねばならない。喜作は己にそう言い聞かせるが、水腹では何も考えられない。

かくなるうへは辻斬りでも……とも思うが、それも、無理だろう。たとえ

身体が健全な時であっても、そのようなことが出来ない人間であることは己が一番よく知っている。否、二番目かもしれない。それを一番よく知っていたのはお由であった。

お由との出会いがなければ、己の一生は何もなかったのと同じだったと思う。お由との記憶と、子供たちのはじける笑い声が、今の喜作の生きる力の源泉である。

夕日の残照が消えて、漆黒の闇が迫ると、辺りは急速に冷えてきた。大店の手代ができて、喜作を一瞥すると、常夜灯に灯を入れた。

再び西の方から足音が聞こえる。今度は、やくざ風の若い男である。

「てめえ、何を見てやがる」ドスの利いた声で男が言った、喜作は無言で、男の頬に斜めに走る傷痕を見ていると、苛立った男は懐から短刀をだし、研ぎ澄まされた白刃を喜作の喉元に近づけ

「女がきたろう。女はどっちへ行つた」と言った。喜作が無言を通していると「死にてえのか！てめえ！」と被せてきた。それでも動じないでいると、男は諦めて、白刃を鞘に収めた。

「このくたばりそこないめ！」捨て台詞を残し、足早に東の方向に去った。

喜作は尿意をもよおした。死にかけていても、この場に垂れ流すわけにはいかない。適当な場所を探さねばならない。ぐずぐずしていると尿意が限界に達した。用水桶のタガに手をかけ、立ちあがって、預かった財布を懐に収めた。何とも心地良い重さの財布を、このまま、持ち帰れば、娘たちに飯を存分に食わせてやれる。だが自分は、あの女を助けてやったわけではない。この財布は預かり物だ。財布を持ち帰ったとあれば、自分が出雲の鼠小僧と同じ盗賊ではないか。暗闇に入り、放尿するとホツとして、このまま帰ろうかと、足は西に向かったが、それは一瞬のことで、喜作は預かった財布を女に届けるために東の方向に歩き出した。しかし、逃げた女も、追った男も見えてこない。女はどこまで逃げたのだろう。身重な身体で男を振り切るのは無理だ。男が追いつけないとおもえないのに、それらしい、やり取りも、悲鳴も聞こえない。男は無言で女を刺したのだろうか。そして女は声を発することもなく、息絶えたのだろうか。喜作は小鼻を広げて、辺りに血の匂いを嗅ぎとろうとした。殺されていないとは言い切れないが、近くに女の死体はないようだ。ならば、女は逃げおおせたのか、或いは男が諦めたのか。どちらにしても、あの男なら大声で喚き散らすだろうに。

宵の口を過ぎたとはいえ、宿場町がこんなに静まりかえっているのも不気味だ。商人や農民は、ならず者や暴虐な尊王攘夷の志士たちに関わりたくないのだろう。どこの家も戸を閉ざして、息を殺して、成り行きを見守っているよう

だ。今の世は、誰もが人のことをかまっていられない。喜作とても、こうして崖ツ縁に追い詰められている。女が殺されるところに出くわしても、自分は見守るしかできないだろう。手出し、口出しをしたところで、己が斬られるだけだ。ここ迄落ちて、今更、命は惜しくないが。せめてあと五年、あの子たちが自分で飯が食えるようになるまでは死ねない。

喜作は懐にずっしり重い財布を女に届けるために、男に殺されるかもしれないのに、あの女を追っている。己はバカだと思いが、ここ迄落ちたからには、武士として馬鹿を通す以外にない。喜作は自問自答する。

お由が俺に子供を頼んだように、あの女もギリギリのところでお由に助けを求めてきた。それを受けるのは己が武士であるからだ。たとえ、天朝様の御代になっても、例え毛唐がこの国に来て、俺は侍である。浪人の身であっても、俺は侍の筋を通す。女から預かった財布を、女に戻すために、戻る。

お由はそれを許してくれないかもしれない、しかしどうしてもあの女に財布を返さなければならぬ。財布を預かったままにはできない。女を見捨てる事は出来ない。己は武士の筋を通さねばならないのだ。

喜作は左右の暗闇に小声で「無事か」と呼びかけた。返事はなかったが、右手の奥の闇で微かな気配を感じた。到底逃げ切れないと悟った女が闇に沈んだのだ。女が己の呼びかけに僅かに反応したと同時に

「チクシヨウ。くそあま、何処に隠れやがった」

前方で男の喚き声が出た。行き過ぎたと見て、引き返してきたようだ。喜作に気づいて

「何だ、くたばりそこないか、何処へ行く」

「むこうだ」喜作は前方を顎でしゃくった。

「いけよ」と男が促した。男が道をあげた。己をやり過ぎさせて、背を刺すつもりだろう。通り過ぎて振り向くと、男は喜作を無視して、周囲の闇に光る眼差で女を探っている。男の視線が一点で止まった。拙いと思った。そこはあの女が隠れている方角だ。息の詰まる時間が流れる。男は何も見えない闇の一点に視線を据えると「クククク……」と笑った。くぐもった笑い方だ。喜作の全身に鳥肌が立った。

「おさん、みつけたぜ」これは男の畏なのに、女はこの一言に反応して、悲鳴を上げながら、闇から飛び出した。男が走り寄って女の尻を蹴飛ばすと、女は前にのめって、腹ばいになった。男はおさんと呼んだ女の前に仁王立ちになつて

「妾の分際で男を作って、不逞アマだ。てめえが孕んだその子は、おいらが腹を掻き割って、引き出して川にぶち込んで、鯉の餌にしてやる」

「半兵衛さん、私はどうなってもいいから、この子だけは助けて」男におさんと呼ばれた女は手を合わせた。

「うるせい！」おさんは半兵衛に脇腹を蹴り上げられ、仰向けに倒れた。すると、半兵衛はおさんの腹にまたがり、腰を落として短刀を振り上げた。本気で胎児を取り出すつもりだ。

「待て やめろ」喜作が絞り出した声は、半兵衛の耳に届かない。おぼつかない足取りで二人に走りより、半兵衛の短刀を握る右手首を抜き打ちに払った。半兵衛が絶叫を上げ蹲ったが、討たれた手首は、傷もなければ血も出ていない。

「竹光カア、やってくれるじゃないか！くたばりそこない」半兵衛が言った。

喜作はシマツタと思った。己の刀は、とうの昔に米に化けてしまっていたことを思い出した。

半兵衛がおさんから離れて、短刀を握った。如何にも喧嘩慣れしている様子だ。喜作は竹光を鞘に戻すことも、続けて攻撃することも出来ない。震えながら、後ずさりすると、何かに足をとられ、危うくひっくり返りそうになった。

半兵衛は腫れた手首を舐めながら、怒りに燃えている。

「すまん。勘弁してくれ」

「いいや、勘弁ならねえ。このままほっといても、てめえはくたばるだろうが、ここでおさんと一緒にあの世におくってやるぜ」半兵衛が突進するそぶりを見せた。

「そうか。どうしてもやるのか」喜作は竹光を両手で握り直すと、再び上空の雲が動いて月あかりで辺りは明るくなった。

「やめて、その人は何の関り合いもないんだから」おさんの叫びを無視して半兵衛が突進してきた。

喜作は竹光の長さを利して。前に出て、半兵衛の顔に迫り、半兵衛が立ち止まったところを、素早く振り上げ、振り下ろした。

「ギツヤ」

悲鳴を上げて半兵衛が耳を押さえた。指の間から血が溢れ出た。切り落とすことは出来なかったが、耳は一寸近く切れた。半兵衛は血塗られた手を見るや「やりやがったな、こんちくしょう」喚きながら突き進んできたが、喜作は半兵衛の顔と頭を、尚も竹光で撃ち続けた。

「いてえ。いてえ」喚く半兵衛の顔はみるみるうちに血まみれになった。

ポッキ―乾いた音をさせて竹光が折れた。それを、半兵衛が侮るように笑った。同時に二人の目の先を、おさんが前かがみになって稗の畑の闇の中に消え

ようとしていた。

「まちやがれ」半兵衛が後を追った、その後をよたよたと折れた竹光を持った喜作が続いた。

おさんは、巧みに背の高い稗の畑に潜り込んだ。風もない。半兵衛の声も聞こえない。静寂が続いた。

止めよう。もういい。女を見捨てよう。己には大切な三人がいる……。言い聞かせていると、半兵衛の怒鳴り声が出て、前方の畑の方で女の悲鳴があがった。稗の根元から、半兵衛に追われた、おさんが喜作に救いを求めて駆け寄った。

「また死にそこないか」と半兵衛はあきれた口調で言い

「見逃してやるからそこをどけ」と短刀で喜作を追い払おうとした。逃げ切れないと思った喜作は脇の畑の畝の斜面を転がった。途中から勢いがついて、稗を次々なぎ倒しながら、畑の中に潜り込んだ。前かがみで前進して、二つばかり畝を越えて、再び稗の間に屈みこんで半兵衛の気配を伺った。

半兵衛が近づいてくる音が、時々止まるのは、辺りの気配を伺っているのだろう。喜作は、自らが稗になり切る以外ない。

上手くいくかに見えたのに、辺りを伺おうと僅かに首を回すと、頭上の稗の葉先が大きく揺れた。

「そっちにいたのか。このやろう」半兵衛が怒鳴った。喜作は夢中で稗をかき分け、踏み倒して畑から飛び出した。逃げおおせるかもしれないと思った時に雲が動いて月を覆い、辺りは再び闇になった。喜作は大根畑の中に飛び込んだ。続いた半兵衛は「あつ」と声を上げて隣の肥溜めの甕に飛び込んで、音もなく埋まった。肥えに目を塞がれて前が見えないらしく、半兵衛が手で宙を書き、甕の淵を探している。その手に喜作は折れた竹光を叩きつけた。半兵衛は再び肥えの中に沈んだ。

暫くして、ようやく我を取り戻した喜作はユラユラと歩き出した。半兵衛との死闘はずいぶん長く感じられたから、遠くにげたに違いないと思っていたおさんが、暗闇の中から現れた。二人の死闘を、そしてその結末を見守っていたようだ。其れでも安心できないらしく喜作の背後をしきりに気にするので

「終わったよ。もうあいつはやってこないよ」と言いながら懐を弄った。落としたかもしれないと思っていたが、おさんの財布は喜作の掻い巻きの中にあつた。喜作は汗にまみれた財布を取り出し

「預かり物だ」と差し出すと、おさんは首をさり

「これはお侍様に差し上げたものです。どうぞお収め下さい」と受け取るのを

拒んだ

「迷惑なんだよ」喜作は財布のやり場に困った

「お侍様は命の恩人です。どうぞお納めください」

喜作は改めておさんの顔を見て「訳は聞かない方がよさそうだな」と小声で言い

「じゃあ、こうしよう。俺はお前を助けた。だから助け賃を貰う。それなら文句はないだろう」おさんは、躊躇いがちに頷いた。

喜作は財布のひもを解いて中身を確かめると、大きなため息をつき「金もちだな」と言いながら財布の中に手をいれ、二分銀を一枚取り出した。少し躊躇った後に、更に小粒を二枚と、びた錢をひとつかみ取り出した「これだけでもらっておくと行って、殆んど中身の残った財布を返そうとした。

「それでは私の気がすみません」おさんは後ずさりして受け取ろうとしない。

「かってにしろ」喜作は、おさんの足元に財布を投げた。諦めたおさんは財布を拾い上げ「せめてお名前だけでもお聞かせください」

「名乗るほどの者じゃないが、隠すほどの名でもない」喜作は苦笑交じりに名前と住んでいるところを教えた。

「何れ改めてお礼に伺います」

「その必要はない」言い於いて喜作は歩き出した。

長屋近くに戻って居酒屋の前で一瞬止まったが、頭を強く振って、その場を離れて米屋に向かった。大きな米袋を抱え、権兵衛長屋に戻って戸を開けると、三人の姉妹が、おさんが炊いた飯で、魚や野菜のおかずで、飯を食べようとしているところだった。傍らでおさんが「身二つになるまで匿ってもらいたい」と懇願した。喜作は

「勝手にしろ」と言いながら五人で飯を食った。

了